
ルークとティアとそれからオリキャラ

疾風人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルークとティアとそれからオリキャラ

【Nコード】

N8877H

【作者名】

疾風人

【あらすじ】

ルークとティアの恋愛ものです。

気持ち

ティアは今、タタル溪谷にいる。ある人……ルークフォンファブレをまつて……

彼女は讃歌を歌っていた。兄に歌ってもらった歌、大切な歌。讃歌を歌い終わると、後ろには、かつて共に戦った仲間がいた。

ナタリアが口を開いた、「いいのですか？ あなたもルークの成人式、呼ばれていたのでしょうか。」

……「ルークのお墓の前で行われる儀式に興味はないもの」

次にアニスも口を開いた

「二人とも、そう思ったからここに来たんでしょう。」

少しの沈黙が流れた後、ジェイドが口を開いた。

「そろそろ戻りましょう。」

夜の溪谷は、危険です。」

そう言うと、みんなが背を向けて歩き出した。

その瞬間草を踏み分ける音がした。

ティアが振り返ると皆が待っていたひと、

ルークがいた。

ティアが口を開いた。

「どうして、此処に？」

「此処ならホドが見渡せる。それと．．

約束したからな」

そう言い終わった瞬間、

ティアは、ルークに抱きついた。

．．．ティアは、泣いていた。

どんな時も流さなかった涙

しかし、いまは、溢れている。

そしてティアは、あることを切り出した

気持ち（後書き）

初めてです。おかしいところがありましたらコメントに書いておいてください。

告白！

「ルーク、私はあなたに言いたいことがあるの」

「なんだ？」ルークがたずねるとティアが顔を真っ赤にしてゴニョゴニョ言う

「聞き取れないからもう一回いつて。」

「だから／＼／＼その／＼／＼えと／＼だから．．．あなたが．．．」

「だーかーらー／＼／＼私はあなたが／＼」

「ん？」

そしてティアがこういいきった。

「私は、ずっとあなたが好きでした／＼／＼」

「付きあってください／＼／＼」そしてティアは言いきってからさらに顔を真っ赤にした。

皆の反応．．．．

ル・ガ・ア・ナ・「ええええー！ー！ー！ー！！！」

ジェイドも平常心をたもっていたが、動揺を隠せない。
一番テンパっているのはもちろんルークだ。

（ええええーティ、ティアが、おおお俺を好きだってー！ー！）

次にガイ（おいおいおいそんなのアリかよ！）

アニス（ティアがルークを好き？なんなのこの状況ー！）

ナタリア（なななんですのこの事態はありえませんか！ありえませんかわー！ー！）

ジェイドはそうゆうことよりも先にこの事態をどうにかしようと考えた。

何故かというと、状況的にティアが顔を赤くし、ルークがテンパリ、ガイたちは混乱している

やっとのことで皆は我に帰りルークとティアが話し始めた。

「おおお俺でい・・・良いのか。」

ルークはまだテンパっている。

「ルークだからなのよ／＼／」

ティアもまだ顔が赤い。

ルークは即答で答えた。

「こんな俺でよければ／＼／」

こうして新たな恋人たちが生まれた。

告白！（後書き）

ルークとティアの

雑談コーナー♪

ル「はじまったねー」

ティ「はじまったわね」

ティ「ところでこのコーナーにするの？」

ル「んー書くことないからまた次週！」

ティ「ええええー」

ル「ババババァー♪」

コメディ？

あれから、一日たった。あの言葉がふとよみがえる。

(あなたのことがずっと好きでした／＼)

思い出したとたん、ルークの顔が赤くなる。

俺・・・いま、ティアと付き合ってるんだよね？

「はーなんか実感わかねーなー。」

「どうしてですか？」

「いや、だからずっといっしょにいたから・・・て！なぜミュウがここにいる！」

「それはひどいですの・・・」

「ああ、ゴメンゴメン、そういや昨日迎えにいったんだった。」

そう、実はあの後皆でミュウを迎えにいったのだ。

「そうですの。」

なに！貴様なぜ俺の声が分かる！

「作者の声を聞き取るなんて朝飯前ですの。」

くっ・・・こいつできる！

「あのーミュウさん？一体誰と話しているのかナー？」

「ミュッ！な・・・なんでもないですの。」

「ふーん、そっかじゃあ降りるぞ。」

そう此処は、タルタロスの寝室、皆がいるのは下の部屋、つまりそこがリビングみたいなもの

「作者！話長いですよ！」

うるさいだまってる。

「あのーミユウさん？」

「なんだか分からないけど、先行くよ？」

「ミュッ！待ってくださいご主人様ー。」

ふうやっと言ったか。

「チッ！」ぼそり

！？

ま・・まあ再びルーク視点でどうぞ。

「ういーす。」

ルークが挨拶するとそこには・・

「あっルーク／／／おはよう。」

ティアがいた。

「お・・おう、おはよう／／」

互いに見つめあっていい感じの2人だが・・

「おやー？朝から、ラブラブですねー」

「ですねえー」

それを許さない腹黒コンビ。

さて、アツアツな2人組がいびられている間ほかの奴等を見に行き

ましょう。

まずガイ。・・・「ふっ！たっ！てやあ！」

（絶対に強くなるんだ。）

修行中でした。・・・

ナタリア。「むにゃ、もう食べられませんわー・・・むにゃむにゃ」

爆睡中でした。・・・

ではルークに視点を・・・

「「おいっ！」」

うおっ！ガイ、それにナタリア！

つーかナタリア寝てたじゃん。

「いまさっき起きましたわ。」

「つーか何で俺たちだけこんな扱いなんだよ！」

だっってお前ら出しにくいしいー。

「・・・それだけか！それだけの理由でこんな扱いになるのか！」

・・・

「何でそこで黙るんだよ！」

では、ルークに視点を戻そう。

「ああ、逃げるなー」

・・・ふう何とか逃げれたな。

ん？なにか音が・・・

・・・ドドドドド

「作者ーーーーー」

げっしつけえ
では逃げよう。

とう！

「糞があああああ．．．．．」
再びルーク視点。

ルークとティアは、いびられて顔を赤くして、ソファアーに反対に顔を向けて座っていた。

腹黒たちも飽きて自分の部屋にかえっていった。

しばしの沈黙．．．それをやぶったのは！．．．

「ねえ、ルーク．．．／／／／／」
ティアだった。

「ん、どうした？ティア．．．」

くるっと一回転してお互いの顔を見る。

「あの、その、き 聞きにくい事なんだけど。／／／／／」
「ん？」

「えっと／／ル、ルークって私のこと好き？／／／／／」

「え、う じゅfヘfhぎjmヴおえ？／／／／／」

「ちゃんといいなさいよ・・・」

／＼
「あ・・・あったりめーだろ、　　つーかじゃなきゃ付き合わねえ。／

「それもそうね。」

「あ、じゃあちよつと用事があるから・・・」
「といってルークに近ずき・・・」

「チュッ」

と頬にキスをしてから、

「じゃ、また後でね。／＼」

と言って出て行った。

ルークはそのままポカーンと突っ立っていた。

「作者ーーーーー」

しつけれ！

コメディ？（後書き）

ルークとティアの雑談コーナー♪

ル「さあやってきました。第二回。」

ティ「1回目は、何もしてないわよ。」

ル「うっ・まあそれは置いて、今ここで作者の野郎がコメディも多々入れると宣言したぞ。」

ティ「なんで？」

ル「それは次回のお楽しみ。」

ル「じゃあティア、恒例のアレいくぞ。」

ティ「ああ、あれね。」

ル「せーの！」

ル・ティ「ババババーイ」

番外 ルクティア雑談会

第1回ルクティア雑談会ー♪

ル「さあ今回は、小説の最後にのっている、ルークとティアの雑談コーナーを1話まるまる使ったの番外編とするぞ。」

ティ「なんで、そんな事を？」

ル「定期的にそうゆうことしないと、ネタがすぐ無くなるんだそうだ。」

ティ「ふーん・・・で、話をもどして何でコメディを入れることになったの？」

ル「いや／＼その・・・」

ティ「いいからさっさと言う！」

ル「あーもう／＼俺からじゃ言いにくい、作者ーーー」

作「なんだよ！うるさいなー」

ティ「わっなんか出た」

作「人を虫みたく言うな！」

ティ「あ・・・ごめんなさい」

ル「さて、じゃあなぜコメディを入れる事になったか、教えてくれ。」

作「ん？それ前おしえたじゃないかルーク。」

ル「俺からじゃいいにくいんだよ／＼」

作「あーそうゆうことか、自分で言うのが恥ずかしいんだろ。」

ル「ばっ！／＼／＼／＼そんなのじゃねえよ。」

ティ「？」

作「ほら、可愛い彼女が首傾げてるぞ、早く言ってやれ。」

ティ「か・・・可愛いって／＼／＼」

ル「バカ、そんなんじゃお前呼んだ意味ねえじゃねえか／＼」
作「こうゆうことは、自分で言った方がいいんだぞ。」

ル「ちっしょうがねえなあ／＼／＼言うよ言えば良いんだろ！」

作「おう、おもいつきし言ってやれ、俺は立ち会ってやる」
ティ「話終わった？」

ル「お・・・おう」

ティ「で、どうしてなの？」

ル「コメディ・・・だからだ／／／」

ティ「えっ？」

ル「コメディの方が・・・だからだ／／／」

ティ「よく聞こえないわよ」

ル「あー・・・もう、コメディの方が俺たちがラブラブしやすいからだよ／／／／／」

ティ「へっ／／／あ、いや／／／その／／／／／えと／／／／／」

・・・

ティ「ルークは、その、したいの／／／？」

ル「あ？／／／」

ティ「だから、その・・・ラブラブ／／／／／」

ル「えっ！／／／」

ティ「なによ／／／したくない？」

ル「いや、まあ・・・したいけど／／／」

ティ「じゃあ、コメディでもいいわ。」

ル「あ・・・うん。」

作「よし、話終わったな。では雑談会、スタート。」

ル・ティ「今のがそうじゃなかったの！」

作「ちっちっち、今のは、前振りだったのだ。」

ル「長っ前振り長っ！」

作「元々短いのにルークが延ばすから」

ル「わ・・・悪かったよ」

作「ゲスト入場ー♪」

ル「無視すんなコラ」

ティ「まあまあ」

・・・

ル「来ないな。」

ティ「来ないわね。」

ル「どーした、作者。」

作「ゲスト呼ぶの忘れた。」

ル・ティ「はあ！」

ル「てめーなぜそんな重要なことをー！」

作「ふ・・不覚。」

ティ「どうしてくれるの、企画倒れよ！」

作「よし、今から呼びに行こう！」

ル・ティ「は？」

作「てことで、いざミュウ発進！」

ミュ「はいですのー！」

ル「なんで俺の頭からってのわー！」

ティ「ルーク！えーと大丈夫・・でもないわね。」

ル「く・・糞・・が」

ティ「気絶したわね。」

作「したな。」

ミュ「連れてきたですのー！」

作「・・・早いな」

ティ「ええ。」

ミュ「あれ？なんでご主人様トリップしてるのですの？」

作「ま・・まあとりあえずゲスト入場♪」

ロ「あ・・ど、ども。」

ミュ「テイルズ オブ シンフォニアからロイドさんですの。」

ロ「えーと、一体何なんだ。なんかその青い奴に連れ去られたんだけど。」

ティ「あ・・ごめんなさい今雑談会をやっていてそのゲストに呼んだんです。」

ロ「へーそうなのかーまあいいぜ暇だし。」
ティ「ありがとう。」

ル「復活！」

ロ「うおっ」

ティ「あ ルーク♪」

ル「ってなんだそいつは」

ティ「ああゲストのロイドさんよ。」

ル「ふーんよろしくな。」

ロ「おう！」

作「ってことでまず質問、次のうちのティアがいいかコメントに書いてくれ」

1、ティア 原作と同じティアちょっと冷たい

2、桃色ティア ルーク大好きすぐ抱きつく ほかの設定はそのまま

3、白色ティア 何にも考えずボケーっとしてるティア 天然

ティ「2で良いんじゃないの」

ロ「おい本人が何か言ってるぞ。」

ル「無視だ！」

作「おっとそろそろ時間だぞルーク。」

ル「おっし！じゃあアレいくぞ！」

ル「せーのっ」

ル・ティ・ミュ・作・ロ「ババババーイ」

理由（前書き）

ぶっ壊れます。

理由

「うーん、どうしたもんかなあ」

そう、ここはティアの部屋。今回はティア視点でどうぞ。

（勢い余ってキスしちゃったものの、会いにくいなー）

で、悩める少女・でもないか。　ギロツ・・悩める少女下に降りる。

そして下にいたのは！

「あ、テテテティア！／／／／」

やっぱルークでした。

「ル、ルーク！」

突然の出会い。

「あの、ルーク？その、昨日の嫌だった？／／」

「い・・いやいやむしろすげえうれしかったぜ／／／」

「ほんと？」

「ああ。」

「ありがとう♪」

だきっ

「ええええー／／／ティア！こんな所で」

「誰も居ないからいいじゃない。」

アツアツな2人。

「作者！ご主人様の邪魔するんじゃないですよ！」

うるせーやい。 ところがそんなうまくはいかない。

ガチャ

「「あ。」」

来たのはお馴染み腹黒コンビ。

「おやー？邪魔してしまったデスカー？」

「ん、どしたの大佐？ ってはうわ！もうそんな関係なのー！」

「ちがうの／＼アニス！これは誤解なの！」

必死に弁解するティア。そーだそーだと言うルーク。

「その状態をどうひっくり返したら誤解に見えるのかまったく分かりませんケド。」

「「うっ！」」

アニスの一言で言葉を失う2人。

「そろそろ認めたらどうですかー2人とも♪」

「ジェ・・ジェイド、目が怖いぞ。」

「そ・・そうですよ、大佐話せば分かりますって。」

「そうですか？」

コクコクコク

必死に頷く2人。

「では、あっちの部屋で話しましょうか♪」

「「へっ？」」

「話せば分かるって言ったのは2人じゃないですか♪」

（（しまった、そう来たか！））

2人とも、逃げようとしたが！・・・

ドン！

「「へっ？」」

なぜかそこにはトクナガを巨大化させたアニスがこれでもかという位不気味に笑っていた。

「ア・・・アニスさん・・・なんでトクナガがでつかくなっているのかナー・・・」

「そりゃまあ面白いからに決まっているじゃん♪」

「僕はちつとも面白くないなあ・・・」

「わ・・・私もそうだなあ・・・」

「私が面白ければそれでいいの♪」

「なんて自分勝手な・・・」

「ルール、ここは強行突破よ。」

「じゃあねえな、よし！」

ついにこの小説に初の技登場！ それは・・・

「くらえ、魔人拳！」

「はうわ！そんな本気にならなくてもー」

「よし、ティア！逃げるぞ。」

「うん。」

タタタタタ・・・

「逃がしませんよ♪」

「ちっ、しょうがねえバトルだ、ティア下がってろ！」

「あ・・・うん」

「行くぞ！」

「望む所ですよ、けどあなたに私が倒せますか？」

「さあな・・・」

そしてルークは、ローレライの鍵 ジェイドは槍で闘い始めた。

「はあっ てやあ まだだ魔人拳！」

「ふっ はっルーク、あなた魔人拳しか使えないのですか？」

「ほざいてろ！双牙斬！」

「ほお ちゃんと使えるじゃないですか。」

「残念だがお楽しみはこれからだぜ。」

「なんですって？」

「へっ見て驚けよ！」

そしてルークの周りからなんと魔方陣が出てきた！

「天光満つる所に我はあり 黄泉の門ひらく所に汝あり いでよ神の雷！」

インディグネーション！」

「なに！ ぐはあ」
直撃したジェイドはボタンと倒れた。

「……ぐ どういう事ですか……」

「どうもこうも、これはローレイからもらった力だティア、治癒術を。」

「あ……うん」
パアアアア

「強くなりましたね、ルーク。」

「あったりまえだろ！」（つーか、回復はええよ！）

「そうですね、では戻りましょう。」

「ああ」

歩きながらティアはあることを思っていた。

（ルークのあの魔方陣の色は一体……）

そう、普通魔方陣は青や黄色や緑なのだがルークの魔方陣は燃えるような赤だった。

そしてもうひとつ……

（今回私視点よね？）

すいませんほんとすいません。

とりあえずティア視点でどうぞ。

（と……とりあえず聞いてみよう。）

「ねえ、ルーク？」

「ん、どしたティア。」

「ルークの魔方陣の色って・・・」

「ああ、あのことか、あの色はローレライ　そしてアッシュの音素なんだ。」

「え！・・・そう・・・だったの・・・ごめんなさい。」

「ああ！そんなの気にすんなよ、俺は平気だからさ。」
「そうこう言ってる間に皆の所についていた。」

「あら、話はつきましたの？」

「いつの間にか全員起きて集まっていた。」

「で、話ってなんだよ、ジェイド。」

「ンッフフー♪それをこれから言うのですよガイ。」

「では、なぜ我々がタルタロスに乗って移動しているのかを説明しましょう。」

「「「「うん、それで？」」」」」

「実は先月にうちの部隊が全滅しまして、やっと生き残った1人から聞いたんですよ。」

「その姿は、まるでゾンビそしてローレライと言っていたそうです。」

「目的は、分かったのか？」とガイ

「それが、まったく。」

「で、その調査を行っているのです。」

「闇雲に探してもいないんじゃないの？」

「さすが、ティアいいところきますねー。」

「で・す・が！手掛かりは、あります。」

「「「なに！」」」」

「皆さん声を揃えなくても。」

「そんなことはどうでもいい！早く言えジェイド。」

「ガイ、怒るのは良くないですよ。」

ぼそっ 「出番が無いからってププッ」

「なんかいったか！」

「いえ全然。」

「まあまあ2人とも、喧嘩は良くないよ。」

「ちっ分かったよアニス、でその手掛かりってのは何だ？」

「では、話しましょうか。」

理由（後書き）

ルークとティアの雑談コーナー♪

ル「さあやって来ました第3回。」

ティ「番外含めて4回目ね。」

ル「まいった・・・」

ティ「どしたのルーク？」

ル「ネタがない！」

ティ「ええ！それって大変なんじゃ・・・」

ル「そうだ、大変だ！だから読者様達はこのネタになりそうな事をコメントに書いて送ってくれ頼む！」

ティ「お願いね。」

ル「じゃあ、せーの！」

ル・ティ「ババババァーイ」

最終回（後書き）

本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8877h/>

ルークとティアとそれからオリキャラ

2010年10月13日17時11分発行